AGC レポート
山岳地理クラブ会報

VOL　６８

発行 2020 年 3 月 10 日
公益社団法人日本山岳会　山岳地理クラブ
URL●www.jac.or.jp/doukoukai

AGC レポート（シリーズ：古林道）

# 根利山古道 —その１—

冨永　滋

## はじめに

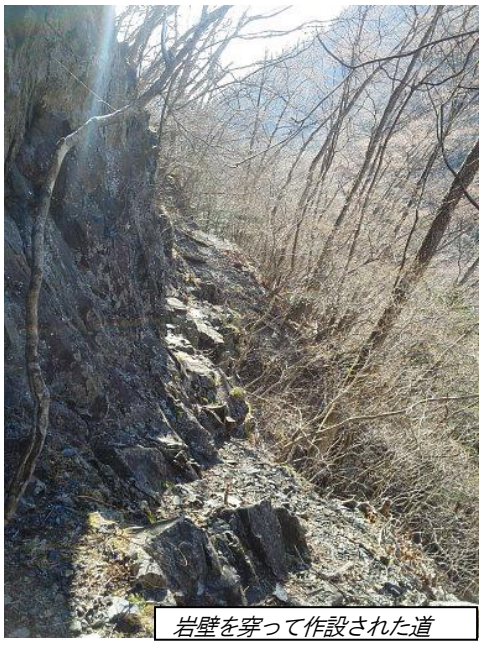
足尾の銀山平から六林班峠を越えて砥沢へ、さらに源公平、平滝などへ伸びる明治時代に拓かれ昭和十年代まで使われた林道（林業用の作業道）は、廃道の定番コースとしてよく知られている。日本山岳会の大先輩、岡田敏夫氏が、昭和五、六十年代に歩いた六林班峠～砥沢の略図と道の様子を報告しておられるし、銀山平～六林班峠も古い地形図に経路が記入されている。さらに増田宏氏は平成十六～七年に通行した貴重な記録を、研究書の中で発表しておられる。増田氏は廃道後六十余年 後に辛うじて通行可能だったとしていることから、約八十年後に当たる今でも何とか行けるのではと予想し、先輩方の歩みを真似てみることにした。

この道は、足尾銅山で用いる坑木を始めとする大量の建築・作業資材としての木材を供給するため、事業主の古河鉱業が足尾の裏山に当たる上州側の山深くに幾つもの町を建設し、大規模な伐採事業を展開したのに先立ち、必要なインフラ整備（町の開設、索道建設など）のため作設されたものである。そのうち銀山平と砥沢を結ぶ重要な経路（ここでは増田氏に倣い「根利山古道」と呼ぶ）を歩いてみた。

## １、【古河鉱業の営林事業】

足尾銅山を経営した古河鉱業の伐採事業の概要については、多くの文献が出版されているので詳細は略するが、明治三十一年に赤城根村砥沢に根利林業所を開設、道を拓き、町を建設し、索道を架ける所から始まった。同三十四年に根利山国有林8600町歩（後年追加分含む）を借受け、泙川の私有林3300町歩を買収、足尾銅山用材の伐採事業が開始された。並行して銀山平から索道の開設を進め、同三十七年に砥沢、三十八年に源公平、三十九年に平滝まで開通、順次これらの町の学校、医療など生活インフラの整備を進めた。更に支線を伸ばし順調に事業を拡大したが、昭和十三年に突如全山を引き払って撤退、十四年八月に残務整理を終えると砥沢の林業所も閉鎖された。

突然の撤退理由は明らかでない。ほとんどの資料が木を切り尽くしたためとしているが、根拠となる文献や資料が示されておらず、聞きかじった話の域を出ていないように思える。と言うのも、根利林業所は伐採地への精力的な植林を行っており、伐採開始から撤退までの三十四年間で、一般的な営林であれば間伐により用材が収穫できるし、あと十年も経てば再伐採の可能性があるからである。では、真の撤退理由は何であろうか。唯一の学術調査と言える、地元の足尾町文化財調査委員会の調査資料では、銅山の縮小、合理化により用材の需要が減少したから、としている。営林を知る者には、納得の行く理由である。根利山のような険しい山地では、搬出の手間を考えると伐り尽くすとは考えにくく、費用対効果を考え、経済的に見合うところだけ切ってお終いにするのが、営林の常識である。当時の情勢では、金さえ出せば用材は十分調達できた。銅山での需要も勢いがなくなったので、費用をかけて大規模に伐り出すより、必要な分だけ購入し、職員を当時人員の逼迫が激しかった鉱山に回そうと考えるのが、普通であろう。昭和十年代の足尾銅山は、国家からの要求にもかかわらず思うように生産が伸びず、人海戦術で何とか乗り切ろうとしていた苦しい時期だったのである。


岩壁を穿って作設された道

古河鉱業撤退直後の、昭和十八年度立案の東京営林局沼田営林署の施行案説明書および、同三十年頃の経営案説明書から、古河鉱業の興味深い営林の実態が見えてくる。栗原川中～上流の植林時期については、明治二十九年以降とされている。沼田営林署による再伐採を受けた栗原川流域についてはそれ以前の資料がなく不明だが、現在見事な自然林となった中小屋峠から津室に掛けての二次林は、明治二十九年の伐採時の天然更新であることが、沼田事業

図からも読み取れる。明治三十一年の根利林業所設立の二年前から伐採が行われていたことになる。間違いではと思ったが、大間々事業図にも、銀山平の奥、一の鳥居付近の庚申川両岸の明治二十五年の伐採を示唆する記載が見られた。根利林業所は、索道がなかった開設当初、木炭や薪を産出していたという。この伐採が古河関係であることを示す証拠は見つかっておらず、あくまで推測に過ぎないが、本格的な伐採以前に、人力による林産物の生産を始めていた可能性が考えられる。なお貸地もしくは立木販売等により、地区内の伐採が完全に自由になったのは、明治三十四年からとされている。

伐採地には、栗原川中、上流ではヒノキ、カラマツが植林され、カラマツは良好だが、ヒノキは適木・適地でなく概して不成績と、営林署は古河鉱業の造林の不備を断じている。確かに今年（令和元年）見た津室の上の北斜面のヒノキ植林の生育状態は酷く、大正七年、すなわち百年前に植栽されたのにせいぜい三十数年生にしか見えない不成績ぶりである。栗原川上流のアカマツも同様に、不健全な林相を呈しているとされた。例えば、現在も平川流域の丸山峠付近で見るアカマツは、植林というより雑木に混じって生えたただの自然木にしか見えない。この様な古河の失策も、沼田営林署の再伐採により、現在栗原川中、上流域では姿を消している。一方、栗原川の下流から中流にかけては、植林、天然更新とも生育が良かったといい、その片鱗は今でも円覚付近の素晴らしい二次林に見て取れる。

古河の造林技術の稚拙さに対し、索道技術が非常に優れていたことは、営林署も暗に認めている。古河の技術は、明治時代とは言え世界最先端のものをベースにし、それを古河の技師がさらに改良したものであるから、当然だった。古河から栗原川の森林の返還を受けた営林署は、昭和二十年代になり本格的に事業開始を模索するも、円覚付近の断崖が障害となり、車道の栗原川林道建設は遅々として進展しないことを、説明書中に白状している。営林署の索道技術はまだ発展途上にあり、十粁に及ぶ長距離索道を通す技術が普及したのは、昭和三十年代後半以降のことである。古河が遺した2千300百ヘクタールの植林地に手が付けられず、指をくわえて見ているしかなかった。

銀山平から砥沢を経て追貝を結ぶ古河の道は、山林の返還を受け直ちに、営林署の歩道として設定された。例えば古河鉱業が砥沢を去ったその年に、4075米の砥沢林道（歩道、幅1．0米）が設定されている。その区間は不明だが、距離と名称から見て、砥沢～六林班峠の部分と思われる。同様に、小森林道（距離4000米、幅1．2米、追貝～小森か？）、円覚林道（距離7669米、幅0．9米、小森～砥沢か？）が設定されたようだ。根利山古道と聞くと人知れず埋もれていた道のように聞こえるが、古河後も営林署の作業道に引き継がれたのである。

困難を極めた栗原川林道の開設工事も、昭和四十年代にはようやく円覚付近の断崖を越え上流域に到達した。周囲の森林を伐採、植林しながら車道は伸延し、昭和五十五年頃には、伐採はついに六林班峠の直下に達した。明治三十五年に古河の索道が伸びていた権兵衛原動所に営林署の伐採が到達するまで、八十年近くを要したのである。この頃には、古河の遺した古道の役目は車道に置き換えられ、その一部だけが車道から造林の作業場へ向かう連絡路として使われていたと見られる。その証拠に、例えば砥沢上の古道の傍らに、昭和五十五年の植栽を示す札が掲げられている。従って、植林が一段落したこの頃から、古道の使われない部分については劣化が進んだのではないだろうか。

古河撤退後の平川流域は、栗原川とは異なる経過を辿った。山林は三陸木材工業に売却され、昭和二十六年から古河植林地の再伐採が始まった。三陸木材の伐採は特徴的で、第一にニグラ沢および平滝、津室の線から下流側に限られたこと、第二に全山を伐採せず虫食い的であったことである。つまり平川の古河植林地のうち、下～中流域の中でも特に生育の良かった部分だけを選択的に伐採したことが窺える。広大な山林のうち伐採に適する面積が少なかったため、入山後僅か十三年で撤退することになったのであろう。平滝道の沿道では、延間峠～中小屋～中小屋峠のカラマツ植林が昭和三十一年、津室～丸山峠の中ほどで現れるカラマツ植林が同三十年の植栽、丸山峠南のミズナラの二次林が同三十七年の伐採、後津室沢源頭のカラマツ植林が同二十九年の植栽、後津室沢中流域が同三十七年の伐採である。これらの事実からして、古河が拓いた平滝道は、三陸木材の作業道として引き継がれたことが示唆される。昭和四十年に沼田営林署の管理下に入るも、以後大掛かりな伐採は行われなかった。広大な所轄を抱える沼田営林署は、根利山では当初栗原川の開発に注力しており、平川の三陸木材の植林が伐期に入る頃には、木材価格の低迷により経済的に合わなくなったためであろう。

*経路の東半分*

*経路の西半分*

**2、【そもそも古道と言えるのか】**

砥沢・津室・平滝の廃墟と索道施設跡に絡めて古道という表現を用いると、古河の撤退以後、顧みられることなく打

ち捨てられていた道のように聞こえてしまうが、それは一面的な見方であろう。確かに一部には、一の鳥居～樺平のように全く使われなくなった区間、砥沢～八丁峠のように植林で荒廃したり、不動沢～延間峠のように車道建設で破壊されて、ほぼ消滅した区間もある。しかし、多くの部分は現役の作業道、山道として受け継がれている。

根利山古道（銀山平～砥沢）について言えば、銀山平～一の鳥居の庚申川左岸に付いた「桟道吊橋の数え切れぬ程の連続」する道は、昭和四十年代の車道開通以後、完全に失われたと思われる。一の鳥居～樺平は古河の根利山撤退後、用途がなくなり直ちに廃道となった。昭和二十九年の記事では、「一の鳥居で左は六林班峠への道、右は庚申山への道と分かれる。六林班峠への道は荒れて通行困難になってしまった。」とされ、一部のガイドに触れられてはいたものの、次第に忘れられていったとみられる。地形的な危険度が高く、現在はもはや一般の通行は困難である。樺平～六林班峠は、荒廃が進んでいるが、一応今でも登山道の位置づけである。六林班峠～砥沢は、沼田営林署（現在は利根沼田森林管理署）の作業道であり、最新の施行実施計画図にも記載された現役の作業道である。ただし昭和五十年代の植栽後はさほど使われておらず、荒廃しつつある。

平滝道（砥沢～平滝）については、栗原川流域の砥沢～延間峠と泙川流域の延間峠～平滝を分けて見る必要がある。栗原川のうち砥沢～八丁峠は、昭和五十年前後の植林地であり、多くの作業踏跡がある。本来の古道は各所の崩壊で使えなくなり、営林署の作業道、根利山会の参拝道が別途開発されたようだ。従って厳密に古道の道を辿れば古道歩きとなるが、完全に消滅したため推定ルートで行く部分もある。八丁峠～不動沢、不動沢～延間峠も同時期の植林なのだが、前者が緩やかな地形のためか比較的古道が残っており、現役の作業道でもあるのに対し、後者は古道上に多くの車道（地形図に乗らない無数の作業車道を含む）が造成され、ほぼ消滅してしまった。一方泙川は古河の私有林であったため、第二次大戦前後の一時期を挟んで三陸木材工業に売却され、昭和二十年代後半から三十年代に掛けて再伐採が行われた。この間、営林目的で道が使用されていたと思われ、当時は通行が容易だったようだ。昭和四十年に国有林になると、実質的に目立った施業は行われず、道は荒廃が進んだようだ。当初は、小田倉沢、栗原川源流への釣客の通路となった模様だが、栗原川の車道が開通するとそれも無くなった。しかし散在する植林地の林分管理のためか、施行実施図にはいろいろな作業道が収載されている。延間峠～中小屋～中小屋峠もその一つであり、現役の作業道である。ただし延間峠～中小屋が比較的歩きやすいのに対し、中小屋～中小屋峠は山林の荒廃でほぼ消滅状態である。中小屋峠～津室～丸山峠～平滝は国有林図には示されていないものの、三陸木材時代の道が、所々の消滅区間を含みつつも、辛うじて存続している。時にマーキングテープが見られるのは、さほど遠くない過去に歩かれていた証拠であろう。

**3、【古道の位置】**

前項までは根利山全般のことを含め記していたが、ここからは銀山平～砥沢間に限定しての記述なる。明治三十七年に銀山平に土場が開設され、砥沢への索道が架けられた。その索道建設のため拓かれたのが、銀山平～樺平～六林班峠～砥沢の牛馬道である。重い資材の運搬のため、銀山平から六林班峠までを橇に乗せて牛に引かせて運んだという。この地域の初版の五万分の一地形図は明治四十年測図「足尾」および大正元年測図「男体山」である。地形図に示された銀山平から砥沢までの経路は、地形そのものの不正確さのため厳密ではないが、凡その道の付き方がよく示されている。だが国土地理院図の通例に漏れずこの道も廃道化後も長きに渡り地形図に収載されていたが、改版を経て道の位置がますます不正確になった。営林署管轄内の作業道となり、公式には既に存在しない道の位置は、正確に表しようがなかったということだろうか。

足尾側、特に一の鳥居から樺平にかけては、旧版地形図の地形および道の位置の精度が低いため、正確な道の様子が分からない。そこで実際歩いてみて、GPS記録、基盤地図情報から自作した1、265分の一地形図（等高線一米間隔）、現地での地形観察を総合することで、厳密な地形と道の位置を特定した。GPSは地形や森林等の障害物があるとき位置の把握ができなくなるため、特に山岳地帯ではログを鵜呑みにすることが出来ないからである。歩いてみると、道は見事に一定の傾斜を保って作られていたが、図上に落として見ると約七度の傾斜が保たれていることが確認できた。1317独標北東鞍部を越えるため、そこだけやや急に登っている。樺平の先も同じ傾斜が続くが、樺平を過ぎて一つ目の小沢から境沢1540米左岸出合支沢までは、緩くなっている。この様な道の付け方により樺平付近の緩斜面を直線的に通ることができ、距離を短くすると共に、保守に手が掛かる急斜面を減らしたと推測される。

―――次号へ続く―――

△△△

9時にはほぼ全員が飯能駅北口の3番バス停に並んだ。バス停には、棒の嶺登山口であるさわらびの湯に向かうらしいグループや家族がすでに多く並んでいた。

9時25分発の国際興業バスに乗車して何とか無事に全員座れた。45分ほど揺られてさわらびの湯でほとんど全ての乗客を降ろしたあと小殿バス停に到着。ここは今は飯能市となった元名栗村の中心部に近いところで、下流は入間川となる名栗川に沿った集落だ。立川名栗断層が立川から残堀川を遡り箱根ヶ崎を通り、山王峠から名栗川に到達するのが途中の原市場という場所だが、そこから断層は名栗川に沿って北上しているらしい。しかしながら、詳しいことはわからない。

断層と地震は見直しがなされていて、この立川名栗断層も調査が中断してあまり現実感も深刻さもなさそうだ。

登山の準備をして小殿バス停を出発したのは10時半になっていたが、今日は一般コースで歩行予定時間も短く、焦ることはない。少しバス道を歩くと、右手にしっかり道標が示された登山口が現れる。ここから樹林の中の急登が始まる。意外とさわやかな風が通る樹林を1時間かけて登り切ると稜線に出た。鐘楼を経由する巻き道と、同じく鐘楼を経由する尾根道が分かれているが、我々は稜線を乗越して東側を巻いていく正規の道を選択する。5分も歩くと右側に竹寺の本殿が見えてきた。

竹寺本殿

竹寺は正式には「医王山薬寿院天王山八王子」という典型的な神仏混交の寺で、天安元年丑年（857年）の建立だとか。本殿には、右手に斧、左手に索を持つ牛頭天王坐像とその脇には八王子（牛頭天王の八人の童子）が祀られていて、12年に一度の丑年に開扉されるそうだ。本殿は20年前に焼失したが、4年後には再建されたとのこと。参道下方を眺めると、本殿への登り口には茅で編んだ「茅の輪（ちのわ）」が設けられた鳥居があった。本来はこれをくぐって心身を清めて本殿に参るべきところであったが、本殿に先に着いてしまったのでやむを得まい。本殿脇には木彫りのトーテンポールがあり、女性の牛頭天王が彫られていた。

この竹寺では、春と秋に住職の法話を聞きながら精進料理が楽しめるそうだ。写真を見ると食器が全て竹で作られていて、3000円で10品、6000円コースで20品の精進料理が並び、地元の銘酒・天覧山も供されるそうだ（長い竹筒の徳利で竹筒のお猪口に注いでくれるらしい）。

竹寺からは源流に沿って道がつけられ、高度を上げながら再び稜線を西側に乗越す。しばらく歩くと豆口峠に出る。豆口峠には三角屋根の小屋があるとガイド書にあったのでそこで昼食のつもりであったが、来てみると倒壊寸前のトタン屋根（三角屋根には違いなかったが）の小さなボロ小屋がそれであるらしかった。豆口峠には「神送り場」と言う看板が立てられていた。むかし村に流行病などが起こると、村人が鉦や太鼓を叩きながらここまで来て疫病神を追い払う儀式をやったそうだ。

小殿バス停

豆口峠から少し登った樹林の中で昼食とした。渡辺持参の冷えた缶ビールを皆で一口ずつ味わった。この頃には気温も上がっていたのでこの一口が実に美味かった。この辺りの人工樹林は杉と檜がメインで江戸の頃から西川材と呼ばれていた。当時江戸では火災が多発していたため材木が不足し、この地を流れる入間川や高麗川から荒川を経て大量の木材が江戸に運ばれた。「江戸の西」の川から運んだことから「西川材」と呼ばれるようになったらしい。

昼食を終え歩き出すと、やがて愛宕山の登り口に出る。次回通ることになる関東ふれあいの道③の「伊豆ケ岳を越えるみち」に合するところだ。子の権現は直ぐその先。このコースでは、竹寺と同様に参道からではなく裏からいきなり本殿に出る。子の権現は竹寺より少し新しいが、同じ平安時代の911年の建立という。正式には「天台宗特別寺子の権現天龍寺」という名称で、和歌山県にて子年子月子日子刻に生まれた子ノ聖が、「我登山の折、魔火のため腰と足を傷め悩めることあり。故に腰より下を病める者、一心に祈らば、その験を得せしめん」と誓いをたてたそうで、現在では足腰守護の神仏として信仰されている。さらには「足」転じて、自転車・バイク、自動車の無事故　交通安全を祈願する人も多いとか。

祈願奉納のわらじ

奉納されたわらじに書かれた願い事を読んでみると、「足腰がいつまでも丈夫なように、88歳」とか、「足の痛いのが治りますように、100歳」とかあって、人間の果てない欲望に半分あきれた。鶴田さんも2足セットになったわらじを購入されていた。本来1足は境内に納めるのが習わしだが、ご主人の分にするとかで2足とも持ち帰られたようである。ちなみ

に子の権現のある場所は、西側を流れる名栗川と東側を流れる高麗川の分水嶺になる。次回の伊豆ヶ岳を越える道もこの分水嶺を忠実に歩く事になる。なお、高麗川は曼珠沙華で有名な巾着田を経て、方向を南東から北東に流れを変えて坂戸で都幾川(ときがわ)に合し、やはり飯能辺りで北東に方向を変えてきた入間川に川越市の北の川島で合し、直ぐその先で荒川に合する。

子の権現からは西吾野駅に下る舗装路を途中で分け、つづら折りの急坂を下る。いい加減急坂が嫌になる頃、降魔橋を渡り浅見茶屋に到着して一休み。実はこの先の車道が予想以上に長く、午後の暑い日射しの下を黙々と歩いた。ようやく、開けたところに出たらそこが東郷神社だった。ここでトイレと水飲み休憩。さらに歩く事 20 分、思いがけず出て来た最後の上り道を越えたら吾野駅が見えた。駅手前の曹洞宗法光寺に立ち寄り、1386 年に開かれた 3 つ目で最後の古刹を眺めてこのコースを終了した。

金のわらじ　にて

---

**山行報告**　**関東ふれあいの道 埼玉③**

# 伊豆ヶ岳を越えるみち

**渡辺 真一**

2019 年 6 月 9 日(日)雨 湿度高く気温低い
参加者: 高橋、鶴田、今井、鎌田、渡辺(敬称略、計 5 名)
コースと時間記録: 吾野駅 9:15～10:08 滝不動～10:12 浅見茶屋～10:15 降魔橋 10:25～11:05 子の権現 11:20～11:35 愛宕山～12:10 天目指峠(昼食)12:45～13:35 高畑山～14:20 古御岳 14:30～14:55 伊豆ヶ岳 15:05～15:25 男坂・女坂分岐～15:27 五輪山～15:40 小高山～16:05 正丸峠～16:30 新旧正丸峠道分岐～16:40 集落～17:09 正丸駅(総走行記録距離:16.7km)

関東ふれあいのみち埼玉は3回目にして、ついに雨に遭うことになった。当初予定の8日は予報による雨確率が高かったため、急遽実施日を1日繰り下げたのだが結果的には裏目に。しかし8日は気温が異常に高かったので、予定通り行っていたら暑さで相当しんどかったかも知れない。9日当日は北から湿気のある寒気が入り込んで、朝から雨が降り出していて気温が一気に下がり、半袖では寒いくらいだった。吾野駅に降り立った我々は全員、上下とも雨合羽をしっかりと着込んだ。そして雨に打たれながら、長いコンクリート道を黙々と歩く。石垣にユキノシタの可憐な花が並んで見えるがゆっくり鑑賞している暇はない。そのうち雨の湿気で、顔や頭からはたまらず汗が噴き出して雨水と混じり合い手ぬぐいがぐっしょりになる程だった。歩き出してちょうど1時間で、聖が入山した際に鬼が降伏したという降魔橋に到着。汗をぬぐい、水分、糖分、塩分の補給と装備の再点検。いよいよ、急な山道を子の権現へと向かう。林の中は雨が直接あたらず、思ったよりも快適だ。標高が上がるにつれ気温も心なしか下がってくる。予定時間を短縮して子の権現に到着し、前回美味しく頂いたまんじゅうを横目に見ながら黄金のわらじのところへ。ここでゆっくり休憩をとり、愛宕山で関東ふれあいのみち埼玉②と分かれ、新たなふれあいのみち③へ向かう。

天目指峠の東屋にて

長い道のりなので、天目指(あまめざす)峠に設けられた東屋で早めの昼食を取ることに。
とにかく先が長いので、ゆっくりする暇もなくそそくさと食事を終え、再び西川材の杉・檜の見事な樹林の下を歩く。以前来たときも高畑山までの長さと急坂にあえいだ覚えがあるが、今回もこれでもかこれでもかと言うくらいきつい登りが続いた。そして高畑山に、さらに同じような登り坂をあえいでようやく古御岳(こみたけ)に到着。山頂の東屋で息を整えた。ここまで来ればあとはもう一息で念願の伊豆ヶ岳である。

見事な杉・檜林

伊豆ヶ岳山頂は15時5分前だった。雨で休む時間が少なかったこともあるが、15時という予定通りの時刻に到着できた。
山頂には三等三角点が設置されているのが確認できた。雨はこの時にはほぼ止んでいたが、視界はせいぜい50mと言ったところ。こ

の山名には伊豆まで見えるという説もあるらしいが、とても伊豆どころか麓の一部も見えなかった。伊豆ヶ岳からは迂回コースの女坂だったが、粘土質の急な下りが雨でぬかるみになっており、悲惨だった。ストックさえもつるつる滑る状況で、冷や汗をかきながらようやくの思いで男坂との分岐に到着した。男坂は落石の危険があるので立ち入らないようにと言う看板と通行止めのロープが張られていた。

伊豆ケ岳山頂

ここからは、今までとは打って変わってなだらかな下り道となった。途中には五輪山、小高山という看板の立っている山頂があるがほんの少しの登りで越えられた。ちょうど1時間歩いて舗装道路の脇に立つ正丸峠の看板のところに到着。再び雨が降ってきたので、急いで記念写真を撮り駅に向かう。

正丸峠

道路からは、急斜面のゴミ捨て場のようなところにあるに立派なステンレスの手すりが付いた狭い階段道を林に向かって下る。天候と時刻のせいで林の中は薄暗く、危ない下り道だった。30分ほどで集落のある舗装路に出てほっとした。この道をさらに30分ほど歩いて正丸駅に到着した。

前回の「奥武蔵の古刹を訪れるみち」の後半と、今回の前半となる吾野駅～子の権現（愛宕山登り口）が完全に重複しており、下りと上りという違いがあるにせよ、同じルートを通らなければならないのは少々面白くない。そして今回の後半最後の正丸峠～正丸駅も、次回の「峠の歴史をしのぶみち」の前半で正丸駅～正丸峠が重複する。ここは省略しても良いのではないかという意見もあり、また今回よりさらに長い15.6km、6時間20分の所要時間が示されていることもあり、他の手段にて重複部分は短縮することも考えてみたいと思う。

**AGC会員からのメール情報**　堀内弘栄　氏より

## クジラの全身化石　発見！　上田市、浦野川で

上田市築地の浦野川において、かつて上田が海だった頃の1290～1250万年前とみられるクジラのほぼ全身の化石が発見された。というニュース
クジラの化石は
**種類**:クジラ目ハクジラ亜目・アカボウクジラ科
**地質年代**:新生代第三紀中期中新世（1290～1250万年前
**産出地層**:別所塁層最上部
**大きさ**:保存長約7.7m、最大幅25cm、固体推定全長約8m
というものです。以下堀内さんのメール抜粋

皆さんにも観て貰いたいと思い配信します。
さて　私は上田市上田原本区(川辺小学校、中学校）出身ですので、ウエダアカボウクジラ化石の出場所が良く解ります。
小・中学・上田高校時代は、夏休みに、上田盆地、浦野川などには、小魚つかみや釣りによく行って遊んだ場所です。
また、今回のウエダアカボウクジラ化石の出場所、上田市築地の約 1.5 km先浦野川左岸高仙寺脇に泉田博物館がありますが、
当時からシナノイルカの化石・・・など保存されいて良く見学に行ったものです。
今回の築地地区のウエダアカボウクジラ化石の発掘について、
新第三期中新世時代の上田盆地の成り立ち時代？
別所累層の堆積した 1250 万年前頃の環境など想い浮かべ
大変感動しましたので吾ら仲間にもと思いつつ・・・。
先ずは、https://youtu.be/sxvAJcelcpg　を配信に及びます。

ニュースとそれにともなう発表概要がユーチューブにUPされています。上記アドレスまたは「上田市　クジラ化石」で検索して、是非ご覧ください。
多少なりとも「山岳地理」 に関係あるテーマではないでしょうか？

◎◎◎◎　◎◎◎◎◎

**登山自粛！　今は机上登山を！**

AGC レポート　vol-68　2020 年 3 月 10 日発行
発行：公益社団法人　日本山岳会　山岳地理クラブ
〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-4 日本山岳会　気付
TEL　03-3261-4433　　FAX　03-3261-4441
編集担当：近藤　　E-mail：yoshi-kondo@jcom.home.ne.jp